

ける變遷、即ち、鉢形土器より有頸無花果形壺にいたるそれは自然的發展の上に考へ得べきものありと思ふ點や、又氏の所謂「マーク」を以て製作者の記號とする點などは充分の研討の結果我々は當否を論ぜねばならぬ。然し從來公開せられなかつた *Platté* 文様を有した一群の彩色せられない土器を紹介しこれが彩色土器の發展の他の方向を歩めるものとして、その文様付致の様子を彩色土器と比して記されたるは又我々に一つの新事實（勿論この類に屬すべき鬲形土器は唯一つすでにアンダーソン博士によつて甘肅考古記に圖示されてはゐるが）を教へてゐる。

氏は文様の考察の上に上記二期の聯絡とその前後、ひいては所謂齊家期或は辛店、寺窪期の土器との前後を述べてアンダーソン氏のなした六期を或程度認めてはゐるが、氏自身としての年代考察や遺物の文化的位置關係を論考する事なく全篇たゞ二期の彩色土器及同系統の土器類の忠實なる記録に終始するにすぎぬ。それは吾々によつてものたらぬとされる點ではあるけれど、一面からす

れば遺物の精細なる圖版とその一々についての克明な解説、及びその分類上の位置を記し、またストックホルム極東博物館所藏以外のこの二期の彩色土器の所藏者、及びその土器の形態文様をのせてゐる故に、吾々が本書一冊を所有する事は、この上記二期に於ける彩色土器の全部を把握する事となつて此の點學說の餘りに多く盛られた書籍の多きに過ぎる現在、寧ろ推重すべき作品と言ひ得る。本書は遺物の書籍化といふ地味な努力的な作品である。本書はいはば考古學の一つの素材である。吾々に遺物自身のありかたをつけてゐる。吾々はやがてこの上にこの材料の取扱ひよろしきを得る時、そこに偉大なる建造物をなす事を得やう。しかしそこにはこの素材をあたへられたバルムグレン氏の偉大なる努力がひそんでゐる事をわすれてはならない。（菊俣版、本文一九七頁、圖版四十一）（以上中村）

○ Hubert Schmidt; Cucuteni in der

Moldau, Rumänien. (Berlin u. Leipzig 1932)

——また大學の講義は休んでゐる。併し私にとつて最も必要な博物館の仕事即ち發掘報告だけは目下再び着手してゐる。

と一九三〇年三月故シユミット博士はわが大山村公に當てた書簡で語られてをる。いま私達はククテニ遺跡のよき研究報告に接し、今更ながら大患後の不自由な身體に鞭うつて執筆を續けられた博士の面目を偲ばずにはゐられないのである。

元來ククテニの發掘は博士が序言に述べられてゐるやうにルーマニヤの彩色土器の起源を研究し、またそれがドナウ下流・バルカン地方に於ける新石末期の彩色土器の全文化圏と如何に關係するかを究明する爲に一九〇九年の秋と翌年とに互つて試みられたもので、其の豫報は一九一一年 *Zeitschrift f. Ethnologie* に發表されて學界の注意を惹いたが、爾來絶えて本報告の公表なく、『ククテはいまなほ發表されない』といふ歎きは考古學界の通り言葉となつてゐた憾みがあつた。いま博士晩年の努力を窺められた本報告を見るにそれは内容的に二篇に分かたれる。即ち前篇はククテニの遺跡遺物の研究であり、後篇

はその文化的位決定に費されてをる。

ククテニはルーマニヤの上部モルダウ平原にあつて、ヤツシに近い。住居址はアクロポリス狀をなす丘の端に100×160mの範圍で位し、石壘と溝によつて防備されてゐる。この溝は尖底溝シュアツツクグラベンと稱されて二重に廻されてゐるが内側のはA文化、外側のはB文化の時代に所屬するものと想定された。發掘は此處に二十三の從溝を穿つてなされたが、その際幾多の住居の殘骸が發見された。それは層位的に二期に分かたれ、木骨で漆喰をもつて固めた小屋であり、中には爐のあるものもあるが其のプランは火災による破壊が著しいので知ることが出来ない。なほこの住居址の末期即ちB文化末期には丘の麓の谷にも住居の行はれたことが證された。

土器は遺物の最も重要な部分を占め、A文化、B文化の二群に分かたれる。もとより兩者は明確な層位をなして出土するのではなく、その分類は上層にはB類土器多く、下層にはA類土器が多いといふ蓋然性に基づくもので、またこの故にこそ兩類土器の編年が可能なのである。

より古いA文化は三種の土器を包容する。最初に掲げられるべきは勿論彩色土器でこれはダニューブ地方の所謂 Spiralanderkeramik の影響を著しく牽くもので、支配的なのは白色に表現されてゐる帯狀渦紋であるがなほ暗黄・赤・赤褐・淡褐・赤黄色等が用ひられてゐる。またS狀渦紋や入組紋も豊富であり、壺・鉢・高杯等の器形が多い。次には赤や暗赤色の單彩土器で模様は大して變りないが彩色土器に對しては型式學的に前提をなすであらう。鉢形が多い。更に彩色土器と共に下層から出る刻紋土器がある。大部分は下地なく、その沈線は深く刻まれてをる。刺突紋もあり、圓い沈線模様や斜行沈線模様もあり、この點その形態と共に彩色土器との並ならぬ關聯を呈示してゐる。

B文化の彩色土器は一樣で器形の種類に富むけれども鉢形が壓倒的で腹部の張出が顯著である。これまた手づくねで轆轤使用の痕跡は認知しえなかつた。彩色は多く白色の下地の上に赤・黒・褐色等種々の色調を施したものである。模様は標式的な渦狀紋の崩れが看取される。即

ち帶狀の渦狀紋は波狀紋や入組紋に推移し、それさへS狀の單位模様化せんとする傾向がある。かくの如く模様の種類は夥しく、それと彩色法とによつてB文化の土器は七群十二種に分ち記載されてゐるのである。また從來餘り注意されない土器にC文化の土器がある。これはB類土器と伴出するが殊に上の方に多い。意外なことに全く粗製で原始的な土器であつて、燒成も幼稚、下地も磨きも認められない。かくの如く金屬時代に這入つてかへつて土器が粗末となることは往々見ることであるが、然もなほそれは金屬的な味はひをもつのである。大多數が深鉢であり色は黝色かや、黄色を帯びた黝色で裝飾も亦原始的である。即ち平行沈線が多く用ひられ、ほかに楯目紋・押捺紋・刷毛紋も施されてゐるが、稀に繩目紋のあるはかなり留意すべきであらう。此等土器と共に二類の土偶や骨角器・各種石器や或ひは銅・青銅器等が発見されてゐる。

先づA文化を見るにこれは稀ではあるが銅利器(銅斧)を伴出するから新石器最末期或ひは金石併用初期と見ね

ばならない。この影響はテツサライ第二期の所謂ディミニ式土器に鋭く現はれるところから第一期文化とA文化とは平行するものと見られ、その年代からしてこのA文化は西紀前三〇〇〇―二五〇〇年に該當するものと少くとも二〇〇〇年を降らざるものと推定される。従つてアナウ第三期aと平行するのであるが兩者の關係は密接でなく、寧ろディミニ式土器に於いて兩者の影響の混入が認められる。ククテニとの聯關はかへつて中歐東歐に

求むべく、トリポリエ文化は殆どこれと平行する。兩者とも中歐の渦狀紋土器の影響は著しく、トリポリエにはC類土器もある。これまた北部希臘に見出されるのであつてその點に於いて二二〇〇年頃に終末したと想定される。蓋しこの粗製のC類土器はアイリオ教授の言ふ如くバルチック地方の櫛目土器の傳統をもつた民族移動に基づくものである。またトランシルヴァニアのエレースト遺跡も本文文化と甚だ近似し、S狀渦狀紋が著しいし、更に東ガリチャのホロドニカ遺跡はA・B兩文化の過渡期に相當する。即ちB文化は青銅器時代の盛期に位し、ミケ

ーネ時代とも平行する譯である。なほ表層からはハルシユタツト期の三角鏃とかラ・テーヌ期の留針を出土してゐるがこの頃は遺跡は殆ど無住状態に近かつたらう。ただ無視出来ないのは上層から出土した鐵錐であるが、元來一二〇〇年頃鐵の使用はヒツチからルーマニヤ地方へ傳へられたことを考へると、兩者の文化的交渉の問題が浮び出して盡きざる興味をそゝるのである。

述ぶるは同報告の概要であるが、大判とは言へ百二十頁の裡に遺物を記載し、その文化的位置を幾多の視點から考究して殆ど餘す處なき博士の手腕には敬服の念禁じ難きものがある。尤も彩色土器の起源とか各地の状態に就いては生前自らを持つることの高かつた博士であるだけに俄かに賛同を躊躇される趣きもあらうが、それは少しも本書の價値を損少しはしまし。たゞ私達として困ることは註掲する文獻で色々と比較されてること、其等に乏しい私達は時として理解に苦しむのであるが、これは望む方が無理かもしれない。卷末に土器の聚成圖や遺物の分析表を掲げたのは誠に周到なやりかたである。な

ほククテニの遺物は現在ヤツシ大學と伯林國立博物館に
所有されてをること附け加へて置かう。(角田文衛)

○維新政治宗教史研究

徳重 淺吉著

昨年五月、「維新精神史研究」の大著を公にされた大谷
大學教授徳重淺吉氏は、爾後未だ一年を経ざるに相繼い
て前著に劣らざる底の大冊を編み、題するに「維新政治
宗教史研究」の名を以てせられた。その精力の非凡なる
に驚歎するは敢て筆者に限らないであらうが、著者の近
來健康稍、勝れず臥床せらるゝこと多きを知る者に於て
その念は一層深いものがある。筆者はこの書を前にして
さながら著者の心血のそのよゝに凝固せるを見る心地し
て自ら頭の下るのを覺える。

本書の内容に就ては既に「社會經濟史學誌」上に牧健二
博士の要をえた紹介の載せられてゐるものがあり、限あ
る紙面に於て更に詳細に互ることは望まれないが、之を
要約すれば、「政治史の部面にありてはその運動の中核た

りし尊王攘夷論の本色を、宗教史の部面にありてはその
努力の目標たりし護法護國とそれに表裏膠着して離れざ
りし關那運動の實情を跡つけんとした」ものとする事
が出来た。就中後の問題の如きは從來未だ殆ど何人も手
をつけなかつた領域として著者によつて始めて教へらる
るところ頗る多い。而してその所論の基礎となつた資料
はまた悉く著者自らの努力によつて蒐集せられたもの、
近代の史料は何處にても行くに従つて拾ひうるかの如く
見えて、その實容易に見出し難いものなるを知るものは、
著者の自由に驅使する珍稀なる史料の影に如何ばかり大
きい努力のあつたかを見逃さないであらう。

最後に著者が自己の理想主義史觀の一看點として提示
せらるゝところの義認(Justification)といふこと、——人
が自己の行爲を正しきもの、義に協へるものと自ら信ず
る爲の論理は如何様の形をもとる、それは一般に「理想主
義的」ではあつても必ずしも常に歴史觀とは關はりを有
たないであらう。ただ正しき歴史觀の上に立つて過てる
行爲も亦意味ありしものと顧る歴史家の立場、ヘーゲル